

地域芸能伝承の戦略と「受容者」たちの実態に関する研究

—徳島県三番叟まわしを事例として—

A Study on the Strategy for Handing Down the Regional and Traditional Performing Arts in Tokushima Prefecture and the Actual Conditions of Receivers.

山木ありさ (yamaki_arisa@yahoo.co.jp)

神戸大学大学院人文学研究科 博士課程前期課程

Key words: Buraku, Folk-performing Arts, Strategy of Folklore, Strolling Performance

1 はじめに

徳島県には戦前、民間で非常に親しまれていた芸能があった。それは、旧正月や正月に家々を訪れては玄関先や神前等で人形をまわす「三番叟まわし」という祝福芸である。戦前は徳島県の人々の間で非常に親しまれていた三番叟まわしだったが、戦後急速に衰退し、1960年代以降には遂に消滅の危機に晒されることとなった。その要因となったのは、専ら門付けの「巡られる側（門付け先の地域住民）」の視点から見た、戦争による社会の混乱と民衆の生活の困窮、社会の発展による信仰心の希薄化等であると論じられてきた（ロー2012）。しかし、「巡る側」から見ると、三番叟まわしという被差別部落の芸能——すなわち「負の烙印」としての芸能——を自ら捨て去るという“選択”をしたことによる衰退であったともいえる。

そうした背景により1960年代以降、徳島県の一部地域を除きほとんど途絶える形となった三番叟まわしだが、その後1995年に設立された「阿波木偶箱まわし保存会」を中心として復活を遂げる。その組織的基盤となったのは、1970年代から徳島の被差別部落の生活文化や習俗の調査をもとに、継承困難となった有形・無形文化遺産の伝承・再現を行い、その再評価を促す活動から人権啓発活動に取り組んできた「芝原生活文化研究所」¹だった。この会の活動によって、2014年の正月には県内で計928軒の家々において門付けが行われた。

「阿波木偶箱まわし保存会」は一地域の芸能として他に例を見ない程精力的に、日本全国のみならず世界中で三番叟まわしの公演や、関連の講演活動を行っている。そして地域芸能の復活・伝承にとどまらず、本来の基軸であった人権啓発活動ⁱⁱにも、非常に戦略的な芸の披歴の仕方と講演により、力を注ぎ続けている。こうした「阿波木偶箱まわし保存会」の活動、そして会の行う「三番叟まわし」を詳細に分析することで、本来は負の芸能として消滅しかけた三番叟まわしがどのように戦略的に伝承され、また会の目的達成に用いられているのかをまず明らかにする。

そしてさらに、こうした会の活動および三番叟まわしを「見る」人々に対する調査も必

要であると考えられる。以上のような保存会の精力的な活動は、前身となる動きの開始から既に20年が経過している。県内県外を問わずあらゆるメディアで度々報じられるようになり、知名度が上がって年々多忙になっていく保存会の幅広い活動を、どのような人々がどれほど認識し、どのように捉えているのか——つまり、保存会の伝承活動・人権啓発活動に関する戦略的な行動は「見る側」の人々に対してどれほどのどういった効力を持ったのか——を、調査する段階にきていると思われるのだ。

これまで、地域芸能の伝承については多くの研究が行われてきた。しかし、かつて負の象徴であった芸能に注目したものでは喜田貞吉(2008)や渡辺広(1963)に代表されるような歴史的観点から論じられたものが多く、現在その芸能がどのような演じられ方をしているかについては触れられていない。また、地域芸能の伝承についての研究には芸能を行う側に焦点を当て、観光化に代表されるような“衰退しつつある芸能の生き残り戦略”あるいはそれに伴う芸能の形態の変化を描き出したものが多く(桂2007、陳2012等)、それに加えてそれらの活動を見ている人々に対する調査を実施し、“生き残り戦略”の効果や問題点の検証まで行っているものは見当たらない。元は負の象徴としての芸能であり一時は消滅の危機に瀕したが、保存会が立ち上げられて現在にわたり伝承されることとなった芸能は(例えば香川県の^{ほろこま}春駒ⁱⁱⁱのように)各地に幾例も存在するため、芸能を「する側」と「見る側」の双方の調査を通して「する側」の目的達成のための戦略と「見る側」の戦略に基づく活動に対する認識を明らかにし、現在、そして今後の伝承における具体的な現状と問題点を明確にすることは大変重要な課題であると考えられる。

阿波木偶箱まわし保存会は、組織としての構成や歴史、活動内容等に関しては他の地域芸能保存団体と類似した点が多くあるものの、前述したように他に例を見ない程活発な活動を行っているという特徴を持つ。本稿ではこの保存会の活動の分析や保存会を見る側の人々の分析といった「三番叟まわし」に関する包括的な研究を通して、現在の地域芸能の伝承および目的達成の戦略性について、既存の研究より更に踏み込んだ指摘を行うことを目的としている。

2 阿波の三番叟まわしとは

「三番叟まわし」という民俗芸能は、もともと能楽の演目で五穀豊穡を祈願する「翁」(式^{しき}三番^{さんばん})に由来しており(阿波人形浄瑠璃振興会2005)、来訪神信仰と結びつき、農耕に通ずる所作があることから、1960年代以前には民間で非常に親しまれた予祝芸能であった。予祝儀礼とは、「農事の実際的な開始よりはるか以前に、来るべき一年の農事や農作の様相を、模擬的に実演する行事」(加藤友康ほか2009:705)のことである。つまり、阿波の三番叟まわしは家々をまわって人形をまわす正月興行——門付け——として、徳島県内の庶民の生活に浸透していたのだ。「門付け」の定義として朴(1985)が「迎える側と訪れる側とが設定され、門口で出会い、神の力を借りて演ずる芸能と米や銭との交換過程」である

としているように、徳島県の三番叟まわしもまた、正月や節句などの特別な日に 1 人から数人の芸人が千歳、翁、三番叟、えびすの大体 4 体程の人形を箱に入れて家々をまわり、五穀豊穰・大漁祈願・商売繁盛・無病息災・家内安全などを予祝し、祝儀を受け取る形式のものであった。三番叟まわしはあくまで「神事的なもの」「神事芸能」であったため、三番叟まわし芸人は正月の予祝以外にも地域の家屋建築の際には地鎮祭を行うなど、地域内で呪術師的な役割をも担っていた。

こうした阿波の三番叟まわしの芸態は淡路から流入してきたと考えられ、流入期は少なくとも享保期（1700 年代）にまでさかのぼることができる（永田 1983）。近世阿波の賤民身分の中でも、三番叟まわしは吉野川上流域の三好郡等に存在した「掃除」系の被差別部落民によって担われた。そのため、徳島県のえびす舞^{iv}や三番叟まわしは祝福芸として喜ばれる一方、被差別部落の芸能という「マイナスのイメージ」で捉えられ続けてきたのである（辻本 1999）。

そうした背景を持ちながらも、戦前までは庶民の生活に深く関わってきた三番叟まわしであったが、戦後急速に衰退し、1960 年代以降にはほぼ途絶える状況にまで追い込まれる（「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進実行委員会 2012）。それは既に述べたように、「巡られる側（地域住民）」の視点から見れば人々の生活様式や価値観の変化が大きな要因であったが、「巡る側」から見れば被差別部落の芸能としての負の烙印を捨て去るという選択による衰退でもあったと考えられる。こうした流れの中で、消滅寸前にまで追い込まれていた三番叟まわしの継承に成功したのが、現在の「阿波木偶箱まわし保存会」だったのである。

この保存会は、徳島市芝原地区出身であり、保存会の顧問を務める辻本^{かずひで}一英氏が、地元で部落解放活動を行っていく中で、地域の生活文化の掘り起こし・再評価を行い、当時ほとんど消えかけていた三番叟まわしの継承にも着手したのが始まりである。1995 年に発足した「箱廻し『三番叟』『えびす舞』を復活する会」（現「阿波木偶箱まわし保存会」）を中心に、阿波の三番叟まわしの調査研究が行われ、1998 年には以前より活動に参加していた中内正子氏が三好地方で現役で門付けを行っていた男性に弟子入りをして、3 年間の同行の末、門付けを受け継いだ。写真 1、写真 2 は中内氏が門付け先を訪問する様子である。



写真1 中内氏らが正月の門付けを行う様子（2012年）



写真2 中内氏らが門付け先で家人と歓談する様子（2012年）

中内氏らは、三好地方の芸人の男性（師匠）に3年間同行し門付けを記録するとともに、その芸態や詞章を継承し、さらに檀那場（回壇エリア）も師匠が廻っていた地域をほぼ受け継いだ。門付けとして行う三番叟まわしの最大の特徴である、「連絡をしなくても、毎年同じ日時に同じ家に訪れて門付けする」という点も、保存会継承後の門付けにおいても重んじられ、受け継がれている。

3 保存会継承後の三番叟まわし——「場面による芸の使い分け」という戦略——

以上述べてきたような「門付け」における三番叟まわしを、保存会は「パーソナルな・伝統的な三番叟まわし」と呼んでいる。師匠をはじめとして、かつて多くの三番叟まわし芸人が連綿と行ってきた芸態がこの「門付け」であり、地域内あるいは家庭内で特定の時期・日時に演じられるものだったからである。しかし、現在保存会は「パーソナルからパブリックへ」^vというモットーの下、「見てもらう」「知ってもらう」ことを第一とした公開活動（講演・公演）を、様々な場所で年間を通じて非常に盛んに行っている。これは、保存会が三番叟まわしを継承してから行われるようになった、三番叟まわしの新たな側面である。こうした「公的な場」には、「人権啓発・教育と関連付けた公演」と、「地域あるいは日本の民俗芸能としての公演」があり、前者は講演とセットで行われることが多く、後者は他の芸能との共演で演じられることが多い。また前者の場合、人権啓発の内容の講演が行われ、三番叟まわしが被差別部落の芸能であり、どのような環境の中で伝承されたか、また衰退したかという背景が語られた後に実演となる。これは会の本質的な目的である「人権啓発」の意図が如実に表れた三番叟まわしの披瀝のされ方であるといえよう。一方、後者の場合は県あるいは日本の伝統芸能として披露されたり、消えゆく地域文化に対する認識を広め、啓発を促したりする三番叟まわしであるといえる。

つまり、公的な場における三番叟まわしは、講演とセットで行われ「被差別部落の芸能である」ということを敢えて前面に押し出す「公的な場（i）」と、被差別部落の芸能であることを表に出さず、日本あるいは地域の伝統芸能として演じられる「公的な場（ii）」が使い分けられているのである。

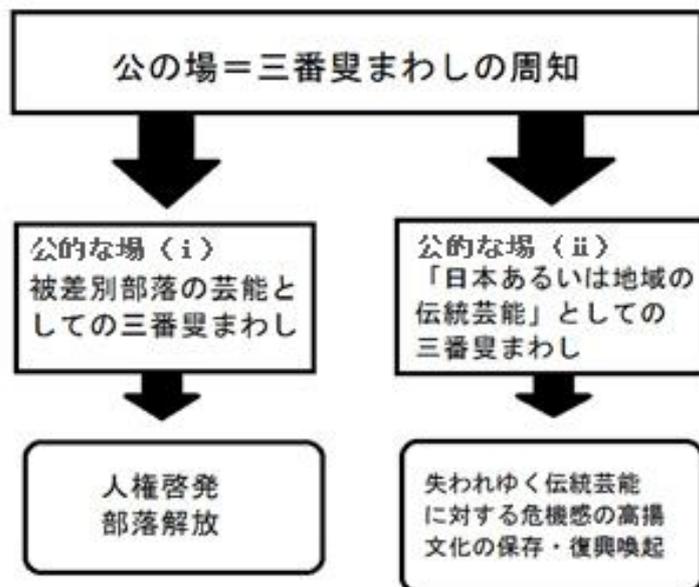


図1 保存会による公（i）と公（ii）の使い分け

こうした公的な場（i） - 公的な場（ii）という三番叟まわしの見せ方の使い分けによ

って、会は一方では人権啓発・部落解放といった会の本質的な目的達成を図りつつ、他方では伝統芸能に対する意識を喚起し、伝承を行っていかうとしていると考えられる。

そして公的な場への進出とともに、保存会が「パーソナルな・伝統的な三番叟まわし」とする「私的な場での三番叟まわし（門付け）」も両立して継続することによって、「神事芸能」である三番叟まわしは、本来の意味の喪失を免れているのである。つまり、私的な場での三番叟まわしが無くなれば、公的な場での三番叟まわしは空洞化してしまう。そうした意味で「私的な三番叟まわし」、すなわちあくまで神事芸能である「門付け」は、「公的な三番叟まわし」の成立のために必要不可欠な活動であると考えられる。また逆に、「公的な三番叟まわし」も、本来的な三番叟まわしである「私的な三番叟まわし」の意味を外部に伝達し、あらゆる啓発を行い、「私的な三番叟まわし」を成立させ続けるために不可欠なものであるといえよう（図2）。

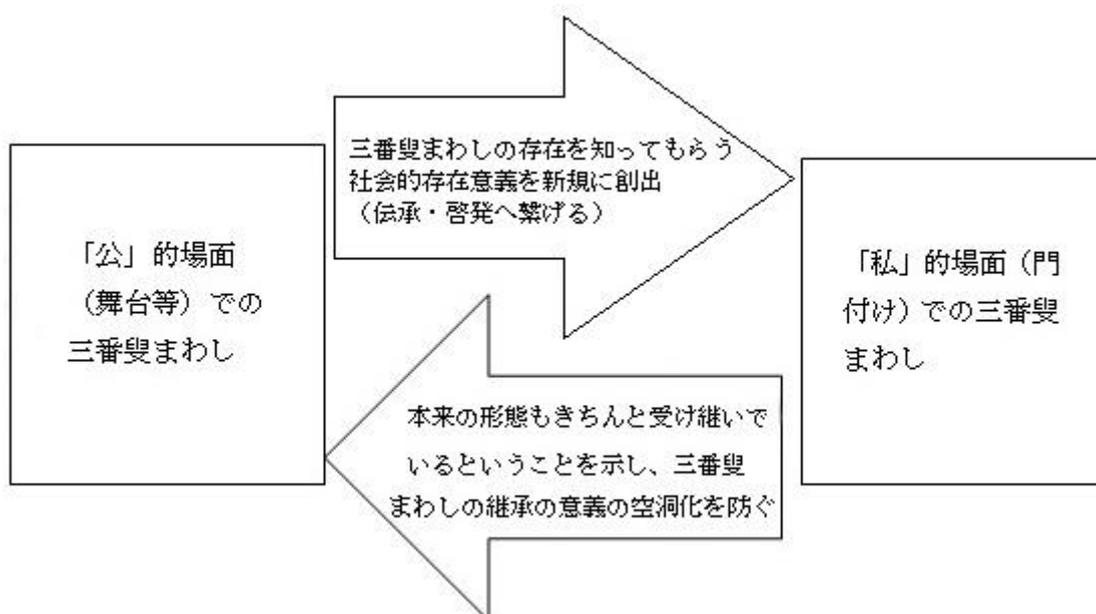


図2 「公的な三番叟まわし」と「私的な三番叟まわし」の相互補完的關係

以上のように、保存会継承後の三番叟まわしは「私的な場」「公的な場（i）」「公的な場（ii）」の3つの場において、それぞれ披瀝されるようになった。だが、各場面において、三番叟まわしの「芸自体」に変化が加えられることはない。保存会は「私的な場」においては家ごとに祝詞の内容を変え、拝みを最重視するが、「公的な場」においては三番叟まわしのテンプレートを披露し、まずは知ってもらうことを第一の目的とする。また、公的な場（i）では芸の前に人権啓発講演が行われ、公的な場（ii）では他の地域芸能との共演や伝承教室の同時開催がなされる。このように、前後の説明の仕方や演出、あるいは演者の服装や舞台の様子等といった部分の微妙な違いで、ひそかに、しかし明らかに保存会は三番叟まわしの見せ方の切り替えを行っているのだ。こうした三番叟まわしの「場面に合わせた見せ方の使い分け」という戦略により、保存会はよりの確に人権啓発・三番叟まわ

しの伝承という目的を達成しようとしていることがうかがえる。

4 3つの場面における「見る側」の人々の実態

前述したように、保存会によって継承されて以降、三番叟まわしは「パーソナルからパブリックへ」という会の方針のもと、限定された空間（門付け＝家庭内／地域内）から公的な場（日本中・世界中の舞台、他地域でのイベント）へ進出することとなった。これにより、三番叟まわしは限定された人々にのみ許された「迎え入れる」という芸能の形態から、より多くの、より広い層が、あらゆる場面において「受容」することが可能な形態へと変換し、それに伴いその意味も変容した。近年、「阿波木偶箱廻し」調査・推進実行委員会」の調査をはじめとして、盛んに衰退前の三番叟まわしの実態についての調査が行われている。それにより、衰退前の三番叟まわしに対する「迎える側」の認識は明らかになりつつあるが、一度は消滅の危機に瀕した三番叟まわしを敢えて絶やさせずに継承し、「現在」三番叟まわしのすべてを担っている保存会の活動を享受している人々の「現在」の認識および実態に関してはいまだ明らかにされていない。そこで以下では、「現在」の三番叟まわし、そしてそれを戦略的に行っている「阿波木偶箱まわし保存会」の活動に向けられる、三番叟まわしの「現在の」受容者たちの「視線」や「認識」、そしてその構成はどのようなものとなったのかについて、既に述べた3つのそれぞれの場面における調査を通して、明らかにしていく。

4 - 1 「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」に対する調査

阿波木偶箱まわし保存会が正月から旧正月にかけて行う「正月の門付け」を自宅に迎えている徳島県下の家庭を対象に、2013年9月にインタビューを実施した。この調査では計25人の回答を収集することに成功した。主な回答者となったのは、県西部で三番叟まわしが中断したか否かに関わらず、「幼少期に少なくとも一度は門付けを迎えたことがある（あるいは見たことがある）高齢者」である。そうした人々はほとんどの場合、三番叟まわしについて語る際「一年の始まりに神様を迎えるありがたい神事」や「懐かしいもの」と述べている。これは「阿波木偶箱まわし」調査・伝承推進実行委員会の平成23年度調査報告書にも多数掲載されている回答内容とほぼ同じである。

しかし、「今後の伝承について」の話になると、ある特徴が浮き彫りになった。こうした高齢者層の発言は、「今後もうちに來続けてくれたらうれしい、それで満足だ」「保存会には門付けを続けていってほしい」といったものに留まっているのに対し、比較的若い年齢で門付けを迎えている人々は、「伝承」のファクターから現状を冷静に見据え、非常に具体的な伝承戦略についてまで語ってくれたのである。特に、昭和38年生まれの男性と昭和43年生まれの女性は、他の地域芸能の衰退の状況を語り、三番叟まわしが今後そうならない

ためにはどうすべきかについて積極的に言及し、自らの考えやアイデアを語った。こうした人々の「伝承戦略」として頻繁に語られたのは、「時代に合わせて見せ方を工夫して変えていき、若年層へ強く訴求していくべきだ」というものだった。高齢者層が「これからも門付けを続けていってほしい」といった、ある種漠然とした希望を述べる中、具体的な地域芸能の生き残り戦略について、積極的に意見を述べたのが若い世代であったという点は、非常に興味深い結果であった。

そして、保存会の活動についての質問でも、ある回答傾向が見られた。門付け先の人々は、地域のマスメディアを通して保存会の活動を年中見守ってはいるものの、「現在の三番叟まわしを行っている人々がどのような人たちか具体的に知っていますか、三番叟まわしをしている人々が正月の門付け以外にはどのような活動をしているか知っていますか」という質問に対しては、「よく知らない」「海外に行ったということは知っているけどよくわからない」等の回答が目立って多かったのである。

以上指摘した(1)「地域芸能(三番叟まわし)の生き残り戦略」について積極的に意見したのは比較的若い世代の特徴であった点、(2)「門付け先はメディア等を通して保存会の活動をチェックしているにも関わらず、正月以外は良くわからないと回答する傾向が強かった」点に留意して、以下では他の場面での調査結果を見ていくこととする。

4 - 2 「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」に対する調査

次に、「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」に聞き取りを行った結果を報告する。2014年7月20日、徳島県阿南市文化会館で行われた阿南市主催・阿南市同和問題講演会「人権文化を考える『福を運んだ人形まわし』」に、阿波木偶箱まわし保存会が出演した。この講演会は、主に阿南市の教育機関で開催の通知がされたこともあり、保育・教育関係者が中心に来場した。そのため、保存会が行う通常の講演・講演の来場者層とは異なり、7~8割ほどを30代から50代くらいの年齢の女性が占めていた。そこで、来場者を無差別に選別し、生まれた年やなぜこの講演会に来場したのか、三番叟まわしを見たことがあるか、三番叟まわしをどのようなものだと思うか等を半構造化インタビュー形式で聞き取った。会場出口で無差別に声をかけて質問をしていったが、前述のように今回は教育関係者の来場が多い講演会だったことと女性の割合が高かったことから、結果的にインタビュー対象者は教育関係者の女性7人となった。結果を聞き取った通りに表1にまとめる。なお、表中の※印は筆者の注記である。

表1 「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」に対する聞き取り調査結果

①保育所教諭(34歳)

・来場したきっかけは、保育所の方でお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。

- ・三番叟まわしはこの講演会で初めて見た。
- ・とにかくこれまでは保存会の活動についても三番叟まわしという芸能についても何も知らなかった。
- ・今日初めて見て、人形浄瑠璃みたいな伝統芸能なんだと理解した。

②小学校教諭（58歳）

- ・来場したきっかけは、学校からお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。
- ・昨年11月頃に、徳島県立産業観光交流センター「アスティとくしま」で開かれた芸能全国大会で一度見たことがある。
- ・被差別部落と三番叟まわしの関係性についてもそこで知った。
- ・三番叟まわしは、人形浄瑠璃と並ぶものだと思う。人形浄瑠璃は3人で人形を遣うので、女性が1人で1000軒もまわっていると知って大変そうだった。
- ・学校は差別についてなどを教えても、どうしてもリアリティを持って考えさせることはできない。こういう風に講演と公演をセットにしてどんどんやってくれたら、子供たちも理解しやすくていいと思う。
- ・教育関係者は人権の授業もあるし、差別との関係を知っている人が多いのではないだろうか。

③小学校教諭（54歳）

- ・来場したきっかけは、学校からお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。
- ・テレビのニュースで見たことがある。
- ・見たことがあるというだけで、何も知らなかった。被差別部落との関係は今回の講演で初めて知った。

※保存会についても三番叟まわしについて何もわからない、と繰り返し強調していた。

④小学校教諭（50代）

- ・来場したきっかけは、学校からお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。
- ・昨年の徳島県立産業観光交流センター「アスティとくしま」での公演で見たことがある（※②の女性と同じと思われる）。
- ・昔から人形浄瑠璃の一座を知っているが、そうしたところとも関係があるということも昨年の公演で知った。
- ・生徒に人権問題を教え、考えさせるにあたり、口で語るより人形を遣って教えたほうが分かりやすいだろうなと思ったので、今後も講演と講演を行ってほしい。

⑤PTA関係者（41歳）

- ・来場したきっかけは、学校からお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。
- ・今回初めて見た。これまでまったく知らなかった。
- ・保存会の活動は、伝統芸能を伝えていく中で同和問題の啓発も行っていくというようなものなのかなと思った。

- ・三番叟まわしの意義は、昔はあったけど今は忘れられている大切なものを、子供だけでなく親に伝えることもできるというところにあると思う。子供は授業で知るけど、逆に保護者の世代が知らないということも多いし、知る機会もない。
- ・今後は子供と親と一緒にこういうことを学べるような、今日の講演・公演の短縮版のようなものを開いて行ってほしい。人権を親子で学べる場がほしいと思った。

⑥PTA 関係者 (41 歳)

- ・来場したきっかけは、学校からお知らせがあったので、それを見て来ようと思った。
- ・今回初めて見た。
- ・とにかくこれまでは何も知らなかった。
- ・芸能をしながら、人権啓発を行うものなのかなと思った。
- ・私たちの世代はこういうものに触れる機会がないので、親子で勉強できるような場があればいいと思った。

⑦PTA 関係者 (40 歳)

- ・今回初めて見た。自分の周りでも知っている人はいないと思う。
- ・これまではとにかく何も知らなかった。
- ・今日の講演会を見て、芸能を通じて人権問題を教えるような感じなのかなと思った。
- ・親子で参加できるような講演・公演があればいいと思った。

この調査結果において注目すべきは、PTA 関係者が話した「20 代～50 代辺りの親世代の方が、かえって子どもたちより保存会や三番叟まわしについて知らないのではないか」という意見である。子どもたちは学校の人権の授業や地域文化に関する授業などで、度々保存会の活動に触れる機会を持っているが、保護者世代は今回のように“学校からお知らせがあった”上で“自発的に見に行かない限り”保存会の活動に触れる機会がない、ということだった。そして、今回調査対象となった 7 人の中には自宅や実家で門付けを迎えている人はおらず、さらに「まったく知らない」という言葉から、おのずとその周囲にも門付けを迎えている人は存在しないことも推測される。

この調査から、過去に門付けを迎えた経験があったり、現在も保存会の門付けを迎えていたりする高齢者層と、人権問題の授業や総合学習の時間等で三番叟まわしに接する機会がある学生に挟まれた「現在の親世代 (20 代～50 代)」は、自身の周囲を含め、門付けの迎え入れ経験に乏しく、自発的に保存会の講演・公演に足を運ぶ以外には三番叟まわしに触れる機会が非常に少ない世代——空白の世代——であるということが明らかとなった。

4 - 3 「他の団体による『伝統芸能』も上演される公演で三番叟まわしを見る人々」に対する調査

最後に、「他の団体による『伝統芸能』も上演される公演で三番叟まわしを見る人々」に対する調査結果である。2014年10月18日から19日の2日間、徳島県徳島市藍場町にある徳島郷土文化会館（あわぎんホール）で「第17回阿波人形浄瑠璃芝居フェスティバル」が開催された。今回開催された第17回フェスティバルでは、阿波木偶箱まわし保存会は勿論、徳島県内すべての人形座が出演した。

ここでは、「あらゆる団体の様々な芸を同時に見られる場には、どのような人々（年齢・居住地）が来場しているのか」、また「来場した人々は阿波木偶箱まわし保存会とその活動内容をどれくらい知っているのか」、そして「三番叟まわしを知っているのか（どのようなものと認識しているか）」といった点について調査を行った。

調査方法は来場者に入口でアンケートを配布する形式で、1日につき200枚、2日間で計400枚を配布した。その結果、1日目は63枚、2日目は84枚、計147枚のアンケート用紙の回収に成功した。なお、今回のアンケートでは質問項目に敢えて「三番叟まわし」とだけ記し、文楽の三番叟や能の三番叟との区別を付けない曖昧な表現を用いたが、保存会と「神事としての阿波の三番叟まわし」に当たるものを抽出した結果、丁寧な記述をしているものの大半は該当する回答であった。このアンケートの結果、以下の点が明らかとなった。

- ・来場者の中心となっているのは60代～70代の高齢者である。
- ・20代が2日連続して0人なのに対し、10代が2日合わせて9人来ているのは、県下の高校には浄瑠璃クラブが設置されているところがあるため、その関係で来ている場合と、親に連れられて来たと見られる場合であることが、アンケートの回答から伺い知ることができた。
- ・県内高齢者が大半かと思われたが、県外からの来場者も散見される。
- ・「三番叟まわし」自体は何らかの機会（幼少期に迎えていた・イベント等）に見たと回答している人々でも、「阿波木偶箱まわし保存会」の存在、またその活動内容についてはきちんと把握していない場合が多い。
- ・各人がどういった場で三番叟まわしを見たかによって、「保存会の活動や三番叟まわしはどのようなものか」といった質問に対する回答に違いが見られた。

回答者数147人の年齢層の内訳は、10代9人、20代0人、30代4人、40代14人、50代18人、60代42人、70代36人、80代14人、無回答10人であり、こうした公演に来場する人々は主に高齢者であることが分かった。主催の郷土文化会館も、これまでこうしたイベントにおける来場者の年齢層を数字として把握したことはなかったということで、「高齢者層が多いだろう」とおおまかに判断されていたものが明確な数字となって把握できた点で有意義であった。そして、来場している高齢者層は過去どこかで三番叟まわしを見たことがあったり、元々興味があったりして自発的に何らかのアクション——例えば、保存会の出演するイベントや講演に出向く、マスメディアを通して活動をチェックしている等——を起こしている場合が多いということも明らかとなった。

以上、『伝統芸能』が数多く上演される公演で三番叟まわしを見る人々」に対する調査では、これまで漠然とした予想に基づき把握されてきた来場者の年齢層や、居住地域等の基本情報、過去三番叟まわしを見たことがある人がどの程度存在するのか、そうした人々はどこで三番叟まわしに触れ、どのように三番叟まわしや保存会を認識しているのか、といった点を明らかにすることに成功した。ここでは、県内の60代～70代の高齢者が来場者の中心となっているものの、県外来場者も多少は存在しているということ、「メディアを通じて知った」という人も存在すること、また、年齢層・過去の想起的語り口に関しては「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」と重なる部分が見られる一方で、過去どういった場で三番叟まわし・保存会に触れたかによって、これらに対する認識に変化がもたらされていることもある、といった点を強調したい。

4 - 4 3つの場面の「見る側」の調査結果から見てきた「現在の三番叟まわし」

以上が「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」、「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」、「他の団体による『伝統芸能』も上演される公演で三番叟まわしを見る人々」のそれぞれに対し、各場面において調査を行った結果である。3つの場面において明らかとなった点を俯瞰しまとめることで、「現在の」三番叟まわしおよび保存会の活動の「受容者」となっている人々全体の実態が明らかとなった。

最初に行った調査「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」の中では、特に留意したい結果として、(1)「地域芸能（三番叟まわし）の生き残り戦略」について積極的に意見したのは比較的若い世代の特徴であった」点、(2)「門付け先はメディア等を通して保存会の活動をチェックしているにも関わらず、正月以外は良くわからないと回答する傾向が強かった」点を挙げていた。この2点について、他の2つの場面における調査結果と、既に論じた保存会の巧みな戦略である『三番叟まわし』の使い分け」論を総合して考えると、なぜそうした回答が得られたのか、説明が可能となる。

(1)『地域芸能（三番叟まわし）の生き残り戦略』について積極的に意見したのは比較的若い世代の特徴であった」という点は、「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」の調査結果を参照して考えていくとその意味を把握しやすいだろう。

「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」では、特に注目すべき結果として、「過去に門付けを迎えた経験があったり、その経験から現在も保存会の門付けを迎えていたりする高齢者層と、伝承教室や学校の同和問題の授業で三番叟まわしに接する機会のある学生に挟まれた現在の親世代（20代～50代）が、自発的に講演会や公演に足を運ぶ以外には三番叟まわしに触れる機会が非常に少なく、本人・本人の身の回り含め、門付け受け入れ経験が無い世代——空白の世代——である」ということがあった。ここで明らかとなった「空白の世代」は、「地域芸能（三番叟まわし）の生き残り戦略」について積極的に意見した、

門付け先の人々のなかでも“比較的若い世代”の年齢と丁度一致する。つまり、一様に同じ三番叟まわしを迎えている門付け先の中でも、40代・50代の比較的若い世代が特に三番叟まわしの今後に危機感を持ち、唯一積極的に伝承問題について言及していたのである。そしてその理由としては、「自らの周囲の同年代を見て、“空白の世代”の存在を体感せざるを得ない状況にいる」からという理由に他ならないのだということが分かる。

更に、「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」の調査で、「(三番叟まわしの存在・保存会の活動を)まったく知らなかった」と回答していたのは一般の人々ではなく、比較的保存会の活動に触れる機会を持ちやすいと考えられる「教育機関関係者」であったことも見逃せない点である。教育機関関係者でさえ、自らと同じ年代は三番叟まわしを知らない(なじみがない)という環境の中で、現在門付け先となっている人々は、自然と自分たち以降の世代への伝承の困難さを想像させられるのだろう。こうした人々にとって、「空白の世代」の存在は、たとえ明確に意識されずとも「体感」として実感せざるを得ず、自らが毎年迎えている芸能存続の脅威として、既に立ち現われてきているのだと考えられる。

次に、(2)「門付け先はメディア等で保存会の活動をチェックしているにも関わらず、正月以外は良くわからないと回答する傾向が強かった」という点について、検討していく。ここで分析に用いるのは、保存会の行う『三番叟まわし』の使い分け戦略である。

保存会は既に論じたように、演じる場に合わせて三番叟まわしの披歴の仕方を変化させ、芸の使い分けを行うことで円滑な目的達成(最終的には“人権啓発”)を図っている。これによって、「見る側」にも「使い分け」による影響が出てきているのではないかと考えられる。つまり、場面ごとに適切な芸の披歴の仕方を用いて、より円滑に活動を行おうとする保存会の「戦略」に、(意図せずとも)「見る側」の人々が呼応し、「三番叟まわしを“見た(見てきた)場面”ごとに異なる」三番叟まわしの受容・認識が出現してきている、と考えることができるのである。つまり、保存会が行う「私的な三番叟まわし」「公的な三番叟まわし(i)」「公的な三番叟まわし(ii)」のどれに触れたかによって、「受容者」たちは「三番叟まわし」、そしてそれを行う「保存会」を、各文脈の中で理解しているということ、場面ごとの受容者たちの語りからうかがい知ることができるのだ。

すなわち、(2)「門付け先はメディア等で保存会の活動をチェックしているにも関わらず、正月以外は良くわからないと回答する傾向が強かった」というのは、保存会があくまで「神事」「正月のお神さん事」として行う門付け(私的な場)において三番叟まわしを受容する習慣である「門付け先の人々」は、「正月のもの」として強く三番叟まわしと保存会の活動を認識している、ということである。言い換えれば、彼らは「正月」「神事」としての三番叟まわし以外に関しては、保存会の活動を常にメディアでチェックしているにも関わらず、彼らの中で自発的に語れるほどのインパクトは受けていないということでもある。すなわち現在の受容者たちは、あくまで自らが三番叟まわし(保存会)に触れる機会(門付け)を軸としてそれらを認識し、語るという状態になっているのである。

従って、「人権啓発講演会で三番叟まわしを見る人々」は、人権啓発講演で三番叟まわしの背景知識を得た上での“初めての三番叟まわし鑑賞”となったため、「人権啓発」という視点から語る傾向が強く見られた。また、調査を行った講演会は教育機関での広報がなされたものだったこともあり、「三番叟まわし」および「保存会の活動」の“教育としての有用性”を特に感じたようで、今後の人権教育に関する文脈で三番叟まわしを語る人々が非常に多かった。そして、「他の団体による『伝統芸能』も上演される公演で三番叟まわしを見る人々」は、あくまで“徳島県の伝統芸能が次々演じられるイベント”において三番叟まわしを見ていたため、「伝統」「文化」といった視点から評価する傾向が見られた。しかし、そうした大枠の中でも、過去門付けを迎えた経験がある人などは特に懐古の念を語り（こうした人々は、現在の保存会の活動から個人の幼少期の正月を想起している）、他方、近年イベントや講演、あるいはマスメディアを通じた報道等で三番叟まわしを見たことがあるという人々は、「人権啓発」「伝承活動」「娯楽」など、それぞれに多様な視点からの回答を提示していた。来場者の年齢層が高いため、既に述べたように「過去の三番叟まわし」について語る傾向も強く見られたものの、ここにおける「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」との大きな違いは、「正月」「神事」といった回答のみに終始しなかったという点である。すなわち、「門付けの場で三番叟まわしを迎える人々」と比較すると、こちらではより多様な回答が得られたといえる。

以上のように、保存会が使い分けるとの場面において、最も（あるいは最初に／頻繁に）保存会の活動および三番叟まわしに接したかによって、「保存会・三番叟まわしをどのようなものと認識するか」に違いが出てくるといことが明らかとなったのである。

ところで、三番叟まわしはかつて脈々と伝承されていた時代においても、多様な意義を持っていた。そこでは、「娯楽」「神事」等の各意義（意味）が明確に区別されて演じられたり、享受されたりしてきたわけではない。芸人は自らの檀那場で正月に・あるいは地域に必要とされたタイミングで三番叟をまわしただけなのであるが、それは見る側の人々にとっては、「正月行事」であったり、「神事」であったり、「楽しみ」であったり、「様々な地域をまわる人物から情報を得られる機会」であったり、また、「被差別部落民が行う芸能」でもあった。これは、現在においても変わらない、“三番叟まわし”という芸能が持つ側面の多様性であり、「見る側」一人ひとりの受け取り方の自由でもあろう。

しかし、現在の三番叟まわしはこうした多様な側面の中から、敢えて・意識的に・戦略的に、その時々で強く表面化させるべき側面を選び、適切に用いることでその場に適当な層への確にアプローチするようになった。そしてそれに応じるように、見る側の人々の受け取り方もまた、自らが三番叟まわしを見たその場において、どのような側面が強く打ち出されていたかということに強く影響されるようになったのであろう。

私的な領域でのみ披瀝され、決まった層にのみ享受されていた三番叟まわしが、保存会継承以降はかつて考えられなかった様々な場面で演じられるようになり、それに伴い多く

の人々が容易に受容できる形態へと変化した。それにより、イベントなどの場で初めて三番叟まわしを目にするという人々が多く出現するようになった。そうした中で、保存会は「芸の使い分け」という戦略を用いて、その場に合わせた（その場で三番叟まわしを受容する層に合わせた）披瀝を行い、より円滑に会の最終目的である人権啓発に繋がるルートを構築しようとしている。このような状況定義が行われ、「今・目の前で行われているこの『三番叟まわし』というものは、（神事／被差別部落の芸能／娯楽／日本の・徳島の・我々の芸能）なんだ」と、その場における受容者たちの中である程度の共有認識が形成されるのである。これが現在の、そして保存会が継承して以降の、特徴的な「見る側」の変化であるといえよう。

ここまで保存会側の活動と芸の披瀝の仕方の調査、そしてそれを「見る側」の人々の調査を行い、それら結果をまとめて俯瞰することで、現代の三番叟まわしの特徴が明らかとなった。現代の三番叟まわしは、保存会の明確な目的意識・使命（イデオロギー）に基づき、あらゆる場面で適切な演じ方を選択し、披瀝されている。また、保存会の三番叟まわしを見る側の人々は、かつてでは考えられないほど様々な場面で容易にこれを受容できるようになった。ただし、そこでは、保存会の芸の使い分けという戦略に少なからず影響を受けることとなるのである。

5 おわりに

本稿では、徳島県の三番叟まわしという一つの芸能について、「演じる側」と「見る側」双方の調査結果に基づき、現在の様相を包括的に明らかにした。

調査及び考察を通して明らかになったことは、以下の通りである。

1. 保存会は、「私的な場」「公的な場（i）」「公的な場（ii）」という3つの場面ごとに芸の見せ方を使い分け、神事、人権啓発、伝統芸能伝承の意識の喚起を行っている。
2. 保存会の『使い分け』という戦略的披瀝は、狙い通りそれぞれの文脈で保存会・三番叟まわしを受容者たちに認識させることに成功している。
3. その一方、受容者はどの文脈で理解・認識したかによって異なる強い影響を受け、三番叟まわしや保存会について総合的な認識に至っていない場合もある。
4. 保存会はメディアにも積極的に露出し、あらゆる場で幅広く活動を行っているが、いまだ主な受容者は依然として高齢者層であり、「空白の世代」も存在している。
5. かつての三番叟まわしは、廻ってくるから迎えるといった受動的享受であった。これに対し、現在は容易に見られるようになったものの、見る側の能動的な受容が求められるようになった。

以上の調査とその分析の結果を以て、本稿の問いであった「本来は負の芸能として消滅

しかけた三番叟まわしがどのように戦略的に伝承され、また会の目的達成に用いられているのか」と、「保存会の幅広い活動を、どのような人々がどれほど認識し、どのように捉えているのか——つまり、保存会の伝承活動・人権啓発活動に関する戦略的な行動は『見る側』の人々に対してどれほどのどういった効力を持ったのか——」に対する回答としたい。

かつては正月に廻ってきたから迎える、といった受容の仕方であった三番叟まわしは、様々な場で時期を問わず見ることが出来るようになった代わりに、現在では「〇〇だから門付け先になりたい」「〇〇だから講演・公演に行きたい」といった“積極性を伴う受容の仕方”へと変化したといえる。つまり、現代は迎える（見る）側の迎え（見）ようとする意志・意図が、より重要となってきたのである。それは、現在の門付け先の人々に対するインタビューで、皆何らかの理由に基づく「毎年迎え続ける」意図・意志があったことや、講演・公演の場で明快に「〇〇だから来ました」と回答する人々の姿が見られたことから裏付けられる。しかし一方で、現在の三番叟まわしは「保存会」という、地域密着とは言えない独立した形態の組織によって担われている。そのため、氏子を持つ寺社の地域芸能等とは異なり、「見る側」の人々の中で自らが芸能の伝承の一端を担っているという「当事者意識」は育ちにくいと考えられる。「徳島の・日本の・我々の伝統芸能」としながらも、「見る側」の人々から具体的な伝承についての話が出にくいのも、そうした背景があるからではなかろうか。更に、三番叟まわしを「見る側」の人々は、あと10年～20年ほどで、ほぼ完全に「空白の世代」へと代替わりすることになる。今後の三番叟まわしの伝承には、当事者意識を持った人々の創出と、空白の世代へのアプローチが重要となると考えられる。

こうした課題を解消するために、保存会は2014年より後継者育成を目指す伝承活動を開始した。かつて三番叟まわし芸人が多く居住していた地域の学校の生徒17名を「伝承第一期生」として、長期的な三番叟まわしの伝承に取り組み始めたのである。「当事者意識」という観点から見ても、まずこの地域から始めるというのは至極妥当であるといえよう。これまで保存会は盛んに伝承活動に取り組んできたものの、単発の「体験」となってしまいうことが多かったため、この「伝承第一期生」は本格的な後継者育成の取り組みの幕開けであるといえる。昨年開始したこの伝承活動が、今後どのように展開していくかは大変興味深い。この伝承活動が継続されていった場合、「演じる側」と「見る側」の様相にも変化が表れてくる可能性があり、こうした活動についても、調査を続けていく必要がある。

また、本稿では「演じる側」「見る側」の認識の重なりとずれを把握することに重きを置いたため、被差別部落問題の啓発という視点からの分析はできなかった。さらに、「私的」「公的」という分類の仕方についても、検討の余地があると考えられる。これらについては、今後の課題としたい。

謝辞

本稿は、神戸大学大学院人文学研究科に提出した修士論文の一部を再構成したものです。本稿の執筆にあたっては、神戸大学大学院の油井清光先生、神戸市看護大学の樫田美雄先生から貴重なご助言・ご指導をいただきました。また、調査にあたっては、阿波木偶箱まわし保存会の皆様に快く協力していただきました。心より感謝申し上げます。

ⁱ 「芝原生活文化研究所(阿波木偶箱まわし保存会)」HP <http://www1.kbctv.ne.jp/~ebisu/> (2014年1月10日閲覧)。

ⁱⁱ 後でも触れるように、保存会の活動は被差別部落問題の啓発も目的としているが、本稿ではまずそれらを捨象して、「演じる側」と「見る側」の認識の重なりとずれを考察する。

ⁱⁱⁱ 和歌山県有田郡湯浅町北栄地区の春駒は、三番叟まわしと同様に正月に家々をまわる祝福芸だったが、1960年代に衰退し、途絶えた。だが1980年代に保存会によって復活した。

^{iv} 徳島県内では千歳・翁・三番叟人形をまわす「三番叟まわし」とえびす人形をまわす「えびすまわし(えびす舞)」がセットで演じられる場合が多い。その理由として、徳島県がかつて藍や塩田で有名な商業地であったため、商売繁盛を祈願する「えびす」が迎える人々に喜ばれたからだとする説がある。

^v 本稿では、「私的(パーソナル)」「公的(パブリック)」という分類は、保存会が用いている用語に従っている。この分類については、学術的な観点からの検討の余地を残している。

参考文献

- 「阿波木偶箱廻し」調査・伝承推進実行委員会、2012、『徳島県における「三番叟まわし」「えびすまわし」調査報告書』平成23年度文化庁文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）成果報告書。
- 阿波人形浄瑠璃振興会、2005、『阿波人形浄瑠璃振興会設立50周年記念誌「国指定重要無形民俗文化財・阿波人形浄瑠璃」』阿波人形浄瑠璃振興会。
- 陳愛国、2012「民俗文化に求められる公共性と伝承者の戦術—中国陝西省華県『皮影戯』（影絵芝居）の事例から—」国際開発研究フォーラム41号 pp.31-47、名古屋大学。
- Jane Marie Law, 1997, *Puppets of nostalgia: the life, death, and rebirth of the Japanese Awaji ningyō tradition*, Princeton University Press. (=2012、齋藤智之訳『神舞い人形——淡路人形伝統の生と死、そして再生』齋藤智之、ISBN: 978-4-9904027-4-7。)
- 加藤友康ほか、2009、『年中行事大辞典』吉川弘文館。
- 桂博章、2007、「芸能の保存と伝承について—秋田県仙北市角館を例に—」秋田大学教育文化学部研究紀要 人文科学・社会科学部門62号 pp.29-36。
- 喜田貞吉、2008、『被差別部落とは何か』河出書房新社。
- 永田衡吉、1983、『生きている人形芝居』錦正社。
- 朴銓烈、1985、「門付けについて」『日本民俗学』162号 pp.17-25。
- 辻本一英、1999、「徳島の門付芸・えびす舞—人権文化としての蘇生」『しこく部落史』8月創刊号、四国部落史研究協議会。
- 渡辺広、1963、『未解放部落の史的研究』吉川弘文館。

【編集後記】

『現象と秩序』第2号をお届けします。創刊号より、執筆者数、論文数、頁数のすべてが増えています。どうぞご堪能下さい。

なお、本号掲載の大上梨奈論文は、発達障害中途診断者3名への長時間インタビュー記録を後半に含んでおり、公開が待ち望まれていたものです。これまでの大上氏の研究への言及は、(大上・榎田,2012)に言及対象を限られていましたが、これからは、この(大上, 2015)への言及も多くなるでしょう。

次号は、半年後、2015年10月発行を目指しています。慶應義塾大学の池谷のぞみ氏の神戸での講演記録等の掲載予定です。どうぞ続けてよろしくお願いします。

注記:『現象と秩序』第1号は、ヘッダーの柱に混乱があったため、2015年1月にWEB版のその部分を更新しました。(Y.K.)

『現象と秩序』編集委員会 (2014年度)

編集委員

榎田美雄 (神戸市看護大学)

中塚朋子 (就実大学)

堀田裕子 (愛知学泉大学)

印刷協力

村中淑子 (桃山学院大学)

編集幹事

谷口晴絵 (神戸市外国語大学)

城野真衣 (神戸市外国語大学)

『現象と秩序』第2号

2015年 3月31日発行

発行所 〒651-2103

神戸市西区学園西町 3-4

神戸市看護大学 榎田研究室内 現象と秩序企画編集室

電話・FAX) 078-794-8074 (ダイヤルイン)

e-mail: kashida.yoshio@nifty.ne.jp

PRINT ISSN : 2188-9848

ONLINE ISSN : 2188-9856

<http://kashida-yoshio.com/gensho/gensho.html>